

救命救急センターのきのう～きょう～あす

自治医科大学 救急医学講座

教授 間藤 卓

「救命救急センター」という言葉はみなさんがよく知る名称となりました。また「名前を聞くだけでなにか安心感があるよね」と搬送された患者さんに仰っていただけるまでになりました。しかし正しくその実体を知っている方はそれほど多くないかも知れません。そんな中、24 時間 365 日休まず稼働する救命救急センターは今“曲がり角”に来ているのです。

まず救命救急センターは、厚労省の施設認定を経て厚生労働大臣が定めてはじめて名乗れる名誉ある名称で、個人や病院が勝手に看板を上げてよいものではありません。多いような少ないような・・・ですが、そしてその救命救急センターは、とはいえ救命救急センターとは何をする施設でしょうか？患者さんの「命を救う救命と、急に悪くなった救急の患者さんを診る施設でしょ？」と言われればその通りなのですが、じつはそこが難しいのです。

さらに今や現在全国に 300 ヶ所に増えた全国の救命救急センターの内容はけっして一律ではなく、規模ばかりでなく診療内容や体制まで皆様が意外に思われるほどに異なっているのはあまり知られておりません。その詳細は講演の時に話ししますが、要はその施設自身や母体組織の能力だけでなく、その施設が置かれている周囲のニーズ、さらに都道府県・国の意向などによって、救命救急センターの内容は千差万別な

のです。さらに近年は新型救命救急センターまたは地域救命救急センターと呼ばれるものもあり若干混乱を来しております。

その中で自治医科大学附属病院救命救急センターは、(良い意味で)極めてオーソドックスであり、標準的な救命救急センターとしての機能を(全て)備えているという側面と、やはり北関東の要所に位置することを踏まえた「救命外傷センター」などの大きな特徴をそなえた施設となっています。

さて話題は少し変わりますが、新型コロナの大流行で日本が、医療はもちろん経済や社会自体が大きな影響を受け大きく変化したことはみなさんも実感されていることでしょう。第8波がようやくおさまった現在、これから徐々/急速に流行以前とほぼ変わらない姿に戻る部分もあるかも知れませんが、同時にアフターコロナ時代として新たな時代・社会を迎える/迎えざるを得ないと感じている方も多いと思います。

実は医療に於いても同様で、特に救急医療については新型コロナの影響を大きく受けており、これはまさに”災害”と行ってよい規模とレベルです。自治医科大学附属病院と救命救急センターの様子について、少しでも市民の皆様にご存知いただくためにTwitter (@jichi_eccm) などで発信してまいりました。さらに今後5類への移行の中、どうなるか予断を許しません。

さらにご存じの方も多いと思いますが、機を同じくして改正労働基準法(いわゆる「働き方改革」)に基づき、2024年4月から「医師の働き方改革」として、勤務医にも時間外労働の罰則付き!上限規制が適用とな

り、もちろん救命救急センターにおいても例外ではありません。しかし人口の高齢化や一部の過疎化などにより医療需要が今後ますます増加・集中化していくなかで、安全で質の高い医療を確保しながらも、長時間労働の多い医師の働き方を変えていくのは容易なことではありません。医師の働き方改革自体を取り上げることは本講演の目的ではありませんので詳細は省きますが、先進諸国に比べて医師の数が少なくさらに偏在が指摘される中で、日本のこれまでの医療の質を支えてきたのは、長時間労働を厭わない医師の献身的な働き方があったからという面は否定できません。手前味噌になりますが救急医療体制や救命救急センターにおいてその傾向は顕著であったとおもいます。これを改善しなかり今後 Sustainable(継続性のある)な救命救急センターを運営するのはますます難しくなりますし、我々の施設ですらそうなのですからより規模の小さな施設に於いての苦労は並大抵のものではありません。日々の救急業務を続けながら、50年を迎える自治医科大学というリソースの活用、AIやITなどの支援含めて何とか希望を見いだせれば模索しているところですが全貌については未だ不明な点も多いのが実状です。

ともあれ超高齢化社会と人口減少、今後も繰り返す来襲するとおもわれるパンデミック感染症、待ったなしで終了する法律の猶予期限、さらには遠からず発生すると危惧される南海トラフや首都直下地震と世界的な政情不安など、我々だけで解決できる問題ではありません。市民の皆様も他人事他人任せではなく、まずは救急医療と救命救急センターの実態を把握していただきながら、その中でどう考えどう行動するのか?、それを一緒に考えるささやかな機会になればと思っています。

≪講師略歴≫

氏 名 間藤 卓 (まとう たかし)

≪学歴及び職歴≫

昭和 62 年(1987) 新潟大学医学部 卒業
東京大学附属病院内科研修医

昭和 62 年(1987) 東京大学医学部、アレルギー・リウマチ科 入局

平成 7 年(1995) 東京大学救急部 助手

平成 11 年(1999) 埼玉医科大学総合医療センター
高度救命救急センター 講師

平成 20 年(2008) 同 准教授

平成 28 年(2016) 自治医科大学 救急医学講座 教授

≪代表的著作≫

『ココアはカラダとココロを温める一賢者の飲み物 12 の秘密』
(へるす出版)